

和の心

日頃の雑感を綴った辻井敬子のエッセイです

第四回 白痢からの生還

昭和40年。歩き始めたばかりの弟・もどくんは、『白痢』に罹ってしまいました。

母が夕方もどくんの下痢、嘔吐、発熱に気づいて近医へ連れて行きました。そこで、母は「下痢止め、解熱剤」をいただいて、帰ってきたのですが、そこへ帰ってきた父は、もどくんの様子がおかしいので、このままでは駄目と判断！母と共に別の医院を訪ねました。

今でいうセカンドオピニオン！なんて考えている間もなかったのだと思います。危機を感じたのでしょう。

そこで医師は「これはいかん。『白痢』だ。放っておいて、処置を間違えば、一晩で死んでしまう。入院してもいいが、家の方がいいなら、まず風が入らないように、子供を寝かせる部屋の目張りをしなさい。そして、部屋の温度を一定に保つように」とおっしゃられたそうです。次に「どんなに下痢をしてもいいから、出るものは出させ、水分だけは絶やさないように、与え続けなさい。」と指示しました。

両親は言われる通りにして、夜通し看病をしました。もどすと飲ませ、もどすと飲ませ、下ると飲ませの繰り返し。3日目になり、下痢は止まり、もどくんは一命を取り留めたのでした。悲しいことに、同日7～8人のお子さんが同病に罹り、同県の国立病院で、父の遠縁のお子さんが同病で亡くなり、ニュースにもなったと両親は後日聞いたとのこと…。

時代は今から、46年も前のことです。両親は自然にセカンドオピニオンを取りに行ったわけでは、ありません。そして、アロパシックな治療に納得しなかったのは、両親の勤めです。母の祖父(私の曾祖父)が御嶽山で修行したことで得た生活養生法や薬草などで治療するホメオパシックな考え方が母にも染み付いていたからかもしれません。

実家の母は、世の中の流行とは別に、朝食に「トースト」が出したことがありません。「牛乳」も飲みません。子供の頃から、うちの冷蔵庫に牛乳が入っていたことはほとんど記憶ありません。何かで学んだわけではなく、「好きじゃないから」と言っているだけです。「牛乳を飲まないで、骨が強くない」とか、聞いても、不安な様子を感じている様子も全くありません。たまに「マーガリン」や「チーズ」を買ってきても、最初だけ、表面が黄色くなってしまい、捨てていました。肉も食べるなら、豚を少々。「食事の甘いのは好きじゃない。」と、置いてあっても、料理にはお砂糖を使っていないみたいです。子供の頃の卵焼きも、そんなに甘くなかった記憶があります。先日、泊まりに行き、「チョコレート、食べる？」と出しても、「いいわ。あんまり好きじゃないのよ。」と言っていました。色々健康を気遣って、私の家族はほぼベジタリアン生活になってきたのですが、基本は「母に戻ればいい」と思えるくらいです。

その母に育てられた私。お裁縫で縫い針が指にチクリと刺されれば、刺し傷を触れずに消毒するのではなく、和裁用の握りはさみの柄でトントン叩いて、止血と刺すような痛みを消した。今思えば、叩くことでポリモダール受容器を発火して、炎症を進め、早く治し、痛みの脱感作もさせていたことになっていたことに気がつきます。もちろん、中学の保健・体育の先生には、「ばい菌が入るといけないので、そういうことはしてはいけません」と言われましたが。

当時、予防接種の当日は入浴してはいけませんと聞いても、入らなかった試しがない。母が「そんなことで発熱なんかしないわよ。お風呂に入ってきれいにしなさい。」といつも言っていた。彼女は平気で、自信を持っていたなど思い出します。

義母はさらに年代が上なので、教えていただくことがありました。お腹を壊して、下りそうになった私に義母がくれた「煎じて黒くなった青梅」。ちょっとなめるほどいただくだけで、お腹の差し込みも消え、下痢も止まる。青梅エキスは以来、お腹の友となりました。

しかし、肉食を止めてから、その「青梅エキス」も全く登場しなくなりました。子供たちも、家族全員お腹を壊すことがなくなったのです。

今、最新のライフスタイルは60年代以前の日本の生活かもしれません。母たちの時代に戻ればいいのですね。

昔からの養生法や治療法に、きっと動物としての私たちの生きる基本が含まれているはずですね。

私が母から教えられたように、これからの若い人たちも、『おばあちゃんの知恵袋』をもう一度見直してほしいです。

もどくんも丈夫に育ちました。今ではいいおじさんです。